添水塵效

田中大孝遺草

自筆アリ

[illegible]

4636

山州や雨となく雪となく

もと鶏と云ひしハ唯源氏なくして

若紫の深まきをよしとしるべし　杜撰

葉女

早稲田大学図書

門
號 4636
巻

昭和廿四年四月一日寄贈
高田早苗

古箒に梅のあるゝやらしは　桃
禱葉や和光の蓋の盃　ときお
小山田や初日に田鶴の声うらし
武蔵野や霞まず潤む川の声
長閑さや五日の海の帆船　紀
鶯乃同しこそゆる　篠窓　二柔
句ハせて申し侍るも あるさ同や園の春
絵の具湯ど残る雪解小土筆　は
山の井ふ照る日の漏音く雪解　は

蕪や東に富樓那の酒債
四十地のまくを迎へく
人ならば家も世としの花は春
けりと吹ゆらしとつ鶯は柳に
糸ゆふの伝りてや風のあけ寄らり
若竹やふるき世に縄にまとふかち
ところに膠とうちてや落し角
とし八国の浦辺より
ことしのを越へく　京の八重桜の所より

乃雪のにほふ菊もやかせにたふ
照るゝに向ふちりまや雪の富士
杖となる方ぞ恵みや大かたはる
そふと鐘の白しのとなはもやまの風
秋葉山のうらし
秋葉ふるやそ千年里ぞ修那のなも
光明山懐古
光明靈嶽白雲岱最上巨闕屼相對
闕說龍戰震地但今但見谿風迴

寒澤とやらんに宿り
まくらぬ寒澤のやとりの車
董月寺
緑りさや松千尺の瑠璃の庭
桑名の舟
米果さき田中ゆめ七里ハ合帆
桑名之津
蜃氣作レ樓ヲ煙霞臺霞臺百尺
踏テ浪ヲ閣キ逸ニ着ク帆影ノ流ル雲外ヨリ一片ノ

棹歌唱レ御レ杯
矢矧橋
橋杭の化まの矢たち鈍の葉くらん
駿城弁 うるしき氣まゝ 主の墓に
さくら南せく形見妬くとも春風
家路に心へて
川くらくも我しましく田螺を
後しろの匂渡の雪や初さくら
山遠く後しらぬに書しるく櫻

流れの出水川や小田の末
田鶴ハ山田の氷や解ぬらむ
峰よりのとかなる日影に何そ梅の花
田一枚や小桜百花につゝむ車
桂男のいる軒やよしの花かな
春の日やゆかしく桜もちらずとも
書嘆きも雲雀に啼てうかさてけり
八日花散る中も秋ハ見野の雨かな
蓮の葉の門 田の蛙 啼よふ音

水縄のとしかめ畔や梔花
江の添て
桃抱洋くゐ琴や秋くも天女塞
笠の編や紫みしかり繕小袖
篤人の門えて
菜の花や門に溢るゝ富の泉
蘇我かへるも何しぞ春の雪
片ぶ花の錐やらに庫し明芳観
夜さくらふ小八重桜かむらん人こゝろ

伊那傳兵衛り妙を悟る

寒節を神子擣らん　牛　紫

庭風多子月乾庵して久志くら

喚ましくは徒にかの瀬　米

膝うつに豆腐の芽のや畔至　如来

面影や

常圓揚舎に請ふさき春寛文の

舞なる

俤らもの筆川　菓

帰くりや木九の灰のはし　女小

田中風に嫁し廿一の家徒の卿に白雲吉

とあら姫

米手蝉肩も解くさも芽のなく菊を　露紅

梅園に蝶の揚まる桜の

ししに乱るる蝶ひら

神宿の陰桜谷子なり蝶の雪のしをよび

その川も

池水氏の娘十九歳にて天波ぜるより

鶯鳴も夢しや下りて消ゆるとは

濱洲子の帰人細悼す

せしものの桃を玩や解き春

桃柔子三郎秀子細悼す

糸きれてしまひし空し 風巾

宮驛若衆屋の旅新よりて少女

かゝるかゝちよみんや牛なとかし少女

姉まで戯まで

題宮驛之婦女阿新

宮驛娼婦字阿新翠黛娥眉兆梵身

清歌一轉作夢中金閣弄逢蕩幾人

若衆の枝に宿る旅雀離まくらの組

志ゆくえを帰し

題宮裁橋

此橋也天正年中堀尾勘助十八歳

従大神君戰死爲之慈母架橋

宮裁長橋驛路西影流春水入雲霓 文

洒青蟑欄空存名残闕了送馬蹄

まの酉一里ばかりまで下 駿河よし

帰りし二夜もあらや たる 乃 酉

百道千林とやらん知見の此あ橋世の中

若きふるさとは哀れらし 菊 乃 旅

汐干狩

拾ひんぬりふの干潟のさくら貝

呆 南枝は尋常ゆ 貝の初居し

潮さきは汐満ふ句よやきしの松

綿の卯あ磨き 花つ々つの年

まち田や女備あるか諸の音

住吉奉納

硯 石

鷺も花影向の 鼓もまの留

漏るき此 耳須の春ひ逆之き

米ぐ光留ふ都表殖記ゞ森稼有未世一那

僊はして白髪の友や軒の春

うつまめの男ぬかへり田て猫 戀

当ふ逆ふく田耳を 那つ仁

あ加御 一門 公夜叉の 図 西

初夢のさめても見て茶之碗
人々やとふにさすの　福寿草
初鶴や年寄顔の山[illegible]
老梅の[illegible]てはるや茶[illegible]
摘しこる[illegible]都[illegible]ゝ御膳
皆よしと　総摘の[illegible]
嵯峨の春の表[illegible]の[illegible]

春深し春[illegible]の茶
ぽんと月の[illegible]花[illegible]
　[illegible]の[illegible]
罪業さんまく[illegible]の雪
ことしい気のかと入[illegible]時
花の[illegible]大福茶
春深[illegible]の[illegible]

妄

魚跳ゑる羅ひし　岸の柳

芦中小瀬枝足ゑて　其のこゑ

芰之部

裕荷にいさよふ雛にまきれん
井ふみけの蝶に日おや梢の花
目にすり雛もいちふへの遠ん
何る花血にゆにり紅白畠
夫しる風にそ一まみ ほそりし哉す

玉川

るゝむさ出ふ芦しの人珠郭
牛繩に帰ゝ情しもの月の入るさ出

菊繁の枝も撰りの象る[illegible]
行るとも芑は蓑の露や柳の月
手芹[illegible]藤子哉
空も[illegible]亜山の雲や 吉備楽
宮の色菊も揚屋の[illegible]の月
石花藏るゝの雨や 火おり 笠
明[illegible]川たさ毎しふ鋳る星さる

湯前の神社奉納 [illegible]

神鏡千一円千里や[illegible] 月

門生古槐堂に留守

忘るなよ清ら達ふに出流年の奪
久世氏の帰人奉納吟ずかゝる
神墻の外にも清めける一つ事
り帰人へ留守
神君も清し思や来る帰人
明鏡の姐の月夜や梅卯ま
明日も思ふよ[illegible]の句くや風鳥
大愚法師 を悼

鑿霊前や 苦しみ悔る素亡 塔
一ゑには緑の色ひや 五香水
五月雨や野[illegible]清る草の丈
山伏の追悼に
うかれ[illegible]
面影やいま葉の中も伽羅
[illegible]枝くるしき次黒羽
[illegible]女房の[illegible]
くらく
使を呼しや 裾のむさ[illegible]
紙をいくる

団に咲ものを呼ふも野あらる
おもる葉の風に鈴のる柱かな
蟬のなきす東風ちらかしよ三番
濯るゝの水へ渺りや夕納涼
存かけるの老母なげしむ
萬に帰る人や昔しのみねの花
夕晴や吉原ぞらの雪年ゝ回
巫女る宮や井 猿狸の淵に馬尋ね
姫は許りを生まいけまし

青簾隠子の世話とらかにて
唯心の所造
帆とかぜれば浦の音ある舞かな
盃流の夕なりかくし年ゝ回
混閨扇團扇家人仕業せん
承なくとび人やきまへん混団扇
扇を代捨するあるゝ子
贅物とつまて
ゆく山の手に入る風のあとのきき
幾度の子安へ戻るや生土本爪

地蔵見て帰くるゝ笠根の蜀魂
手向らく蓮の葉風や夕涼
手写の経冊に綵袖の葉ば
送られ句をさしまゐらす
ほとゝぎすほつきしや筆と経冊も
卯の花や鞍馬山の星月夜
若涼しよるとこうに杜鵑
山彦の辞まてかはしかんこゝろ
杜宇そふり思ひ傍に杭
遅桜や枝よ夜浦の朝鳥

載る身は姥ゝとなれんかある螢かな
梅雨晴てや鶏らふ破風の上
夫川蝉に夏めそ杉生妙に露の縁
ほの黒く森の穂まる暑さかな
三尺の画の扇子に夏の重まき
といまさ年
蝉笛や草の一つとなれの門を涼し
雲さしけの木らか蔭隠て宗伴る
藪おくの晴れくし浅黄の浅葱櫨
庭風吹かは凡しもかしほまく偲

岳雑ふ読まれし
東花踏んで雲も錦く郭公
国の峰ましましく人めぐむとて
雨のけやはなきし見て來く合歓の花
ちゃうちの初の見ましや御堂
二ねく信く華葉に風のほうぬ
君の恩をもまり羽
其中しの風や満つるの葉くる
二つのいこく紳せて謝舒の風

待くは嬉しば行く待ち子規
国二の橋の卯の花段み
峰ちるも思ひ暗
新川出て峰も
要川海寸柳の涼
熱海
聲着酒焼火
と浴びる
節まし着涼しの夏

伊豆山の湯にて

おもかげや力くら機の玉割泥

あたみにて

暑さかや當据ふさるゝ峠茨

熱海路の岩峠

攀のぼる帯の蔓や萬乃葛

撤之送別

残んでも毎まかひあらぐずも谷清水

中阿送別

麦梅轉よそも轍よそも蔵まさし

一葉送別

朝よるの蝉いさめしをもり夏や

鶏の甲毛ゝくらり行ばさる納

熱海の浦人玉彦神の森の

羅かとしらる代少て

揚ふ毎ま浦の舟まち乃墨口男

春蓮子送る

結びんや今の萬のうらうらあらし

源平の此まけ落て営の事
みな京に浅かりし墨し峰の松
みな面や声鼓も新の湖しかる
香ハかくさと夜るの あかの名や花卯木
さくら見や打律なふ くにき垣
あれは高ふ筆の低くき夜かな

秋之部

種ぼんと咲しぼりしら飯秋ぞ
白川嵐扇子の風とおもふ頃けり
初一ノや一夢変の後ロら字
蜻蛉の国は鳴の手の中志るゑ秋
母のおしけ恋の走しらぬ桃もゑ
闇まりハ足らぬ月夜や渡しぬ憑
おいしかちらぬなかけり鳥爪

鴫啼て暮坊しおひ日や橋のあふ葉
松の根のちるハちるふ帰け秋のちら
蒸塚ふ雲の音深しあきたしを
王公頁蘆湯て
おちつし山坑して渇宗ふし
足らぬ気ぬ女鹿を啼しの二子山

九井氏之和留別之作兼
次韻余後帰家
芳蔦千嶂色今日為君開分手関山月
我又帰去来

二子山鹿

吹けバ吹く音の山先山も静に帰る

そ此乃台ハ台乃小男しらの

祇丁居士追悼の詞

凡しら霧露を来清風の魂清りと

此乃そら俗くを帰る風とあし

身に揉くらじいざ経読ん西諸の玉

鹿鳴中ぬ去りぬ小行をてぬ

行宗の日和定まり中消しぬり

小夜更て浮しぬるを沸しこる鏡ハ庵

冥帳に記ふてゝ

清の身に百かり穐や禅杖随

きの宿の月ふゝて穿し魂至ふり

諸乃岩橋織る こよハこの本

秋まぬるを眼にさやつる字楊児艶

さつひしけバ箸しけりして朝こそぬるき

秋よかし月の古ふ名て一ノの橋

ゆかしき静る心し哉ハ見し緑緑ハ

一天満宮奉納

玉牆千本の影やうつり　北白

五節に姑めかし惇え

おもふ家も洞の流　まなお

乱れ出寄やめ鹿の作まき　東ッ

稲こくやかとりまつかぞきさまり　處

三秋外房の興

来る人もなく清し男どもの月

傍役の菓なりつ

酔い酔がら羅漢達や　蒙　白ッ

其心後し魂魄に　魂合への

みへもとり篭にかせるに

従ひる袖つゝ露や母やまり　まり

甘泉敷の昔しかるやう

魂鯛や香絶に人の　図

猿氏天死七年の追悼に　西

枝豆に年も七歳のさりけり一つ年

糀盛に帆の浮かなし　落しまり

出る月や霧の上りさゞら波
すり越て朝夜さ涼し縄簾
老の身は何を紫のうつし小袖
背細き人さらし色の月
夜さびしや下に操る〳〵蚕
傾城の名はうき誘ふ夜寒かな
松吉も秋とは紫の露の色
葛菓子の秋 下 秋をも底 上 哀とも笹

たゞし芙の蘭の葉姥の秋
便ひかゝる何ごとも哀れ世は風流
魑魅や風操る紙の二色
暑さにも人の名は秋の句
浮雲やうら〳〵ありて涼しきぞ
時ならぬ月涼しさの酒ある所
新涼し 芭蕉の墨跡月の前
夜水

笛ふきの音きこえし月たふし
けふりや萱ぐさみえし遠種芽
花ぞや雨―――の表引ぬる音
てらり塩や磯千鳥の股日和
清志に寄る岸小花かすみし山気の花
秋の虫もし枝すき通しの葉川鳴
蛍がとぶ会浦宮のや千鳥の声

てらりの小流るきぬ夏の凡月

六

あらし込草や小柴や夕しくれ　北枝
冬雨の裏菊てりや枯野原
煙突しきや灰に書字の筆はしる
木枯はやりに宿してよるも雪
越くして年の奥ゆかしき人ぞ住む

大居禅師の戒会に
神の留主今や十方仏　士由

珉仲和尚と江湖を賀す
月澄て淡つゆや五湖の浦千鳥

仙童師の学業賀して
菜の花や十二僧堂の一座

義存和尚戒主せらるに
御ぐし剃る庵尼の時雨の空高し
沖さうらとふかるゝにつれむ小春の桃
帆よ煙りはなれしくるゝや夕ちどり

雲あに後まきし孤の気に飢へるを
老びりりと
山おろしふ夜や飢ゑるの嗚　来山

只浦にわかし妹がたまに母ハかなしむ

亡母の一七日に

俤をわすれぬ雲にやまふ七日

素堂をいたみて

抱へたる手を向に見て水や

いとふ月ふきてやかましきこの花

医師の身まかりける三周忌に句を

とりまとめて

室村にとせたる六陣を七嶋の雨

葬送せや今朝ハ咲に残る声つくし波

笘船や雪の中にて手かへる

梅面や年寄折小鉢銅

時雨見物に門掃花や我茅

大仏の耳にたれたる落葉哉

咲しかはぎの国の花羽なる

清くとも水の匂ひ煙るり冬しぐれ

一つ鳥しの毛の里ふるし鴨のみや

慈母の許へ老いとも小暗く暖となる

三のちとせ夢のことく花と涙に

やよ姉に似てさつ世にすまる
忙しく風に早し海の音

おゝ中の筆書〇ふきく
まつ麦の畑ぬ〇にゐ雪の下

荒井…
あしきらく汲むや湖も人多き

雪ふる…
霜晴や押念の乱れ名念仏

こけすゝの雲の枯枝や雪催

茶の市月さす人小濁の笠
備よ〇ゐ重り年の暮白ひ

小山子林老人八十の賀小記に送る
やよ川の雲かゝる小山の山をしらぬ小ぬるや
ふるせ後をもかりしで

散るて小町が暦や枯野原
日暮とらん蕪や落葉牛蒡一碗
読の深く渋くや探梅の雪

箕廣ぬきぬ練ら紀師走川
埋火の身ふ深し夜の堂
刈ま出ぬ遠寺の鐘や鴨の声
夜さむらふ雁ふ帆よこ居筆本
渭文子ガ蛮を失ひましふ
冬ざれる日の影ふなげしきの貞
凝古人雪の題
翁
夜座更て音も句も静し深く雪
林
若葉の遠ふ生て夜ゐの雲

雪
夜るの雪しかと降とばまるあり
未
一つしきしの梱の風もよるの雲
乞
いろめしき二王の白や雪もす
氏
ゐるすけ家ふ家継ずぬ夜ろも雪
ゑの風月一椿と咲きならし
咲のそりとしの様越たや濯の腔
炭竈や印借の座の燕ころし
散残るゐの古巣や冬木立

江の嶋下る猪と宿しける主人よ
送る
蓬莱のゆるしに凹りんとまるる喰ひ
山花と月清光れ雲水夜一つ中
裏府崔や人稿りて鴨の声
足柄山の雪ハこゝろに来て自夜の雪を
路傍に一里ハ華山御戯るゝ柳一峰に垂ふる
木枝に雪の峰のこる者ハだや か
膝京花の山ひやつし時雨
寒林水や恋せぬ者かも雅[illegible]なる

雪の日や寄らひ見ぬる鬼のいちら
ほのかに 入る日の松乃ふるかお
孤影の空ゆ我れし乃を思ひ見
あくらもとかめ 流し すり 手の 綿車
雇ほと雲の一夕や 濱いさし
蒼海の春やかの波 磯ちとり
中川のを庭すて 沖のゆる木
飛を押しらせ しとしみ 布
歩も先ず 流れ津を知りふうきさ一つ中

虎
住まぬ花桜小さるとしゑの風
りう紙纏ふ小姥し二重ゑばり
御めし違ふ八幡の模様子
明りり日人船屋中の年の渡し事

文辭之部

己酉の春節は神流山に或神官孫福氏の亭に乃
あび入ぬ家に石川何某に書る几席は役者は由めやかに
登せられける恵し孫膝に古しち美味は甘んあるに
山川一百余里の景は彩に記る志のかにのし乃
神官幻雅なまとて古まは神仕せしるる人のいさるん
生るえ客を見るに寸幻君やはるの御宮星しかるべき
よいれおもつて清ハさうぶ人に元気いさらぶにさそらく
男山さの人に人になきしおもるやしらとそのことの事も
葉末を自き侍りて
偶興なまきまん梅のはなさくば
し

てる迎神の廟に詣て寺宮清神楽は相しく西土人の
密海の尭しも思ひくいとしるぶくちをは
清神楽の声に筆をんし　竹と　木と
おもしろる月の清ま聴かくりとしく　頃かな

風うん浅る辭

流る園を詣いとる妙婦を用しき声いしく足
足るそいしはへて一言由に粗きそもに一床由に
暑まび清楽一と楽二と楽の風に女をび言さをよ孫
とめ月に雪る夜び志をゞある雪の花寒に好もとも
其与雅もしみる人あと一と雪　桜乃　公一と雪なるを覧
流れぬ　山居の有きやけを世川にしと織る西京

やんごとなきころあらりの詩に感じ何ぞれば
薫の節なやとりなへ手旅たちまちにしなりけり離別の
情はおしからて
西風は家は西山のやまと見えし
千世も人々弔ひ送る辞に曰
居士性は松原諱は英純字は千世池西と号せり
大守高崎庠序に仕へ西都に七品の吏となり頃は経世に
云ふものも里民の為に宰し俳諧を楽しむ次公役に
生涯はあいしよくも数俳によりて次公役に
還せざれ資財なし千枝の菌なりし
より芯年の法なる長く青柳の系に連なる
大史公が史にかなふべし司馬貞が類に来べし混雑に

別の様子のごとく瀬に落しなかごの今宵寒き歳
八旬にことせぬる冴えもすゝきの宿さのしもしては
志しきす淋しの影あそ家みんと詠りん人の面影も
あかりのしまきの蝶まるのごとく旅をそわすれぬ
さまは俳仲なおのれたる事ふち姫ゆえるのかぎりは
ちちのかは松にまさるも庭にお仕ぬ裾ど漏るるゆかの
あかりに川きていく身の川をときくも原なく威儀を
松はひ俳諧云の所住に取えき翁家元を伝へくるの
人こそのごとく旅を送りなれたりけれど
伴（ヒツ）にち終る事や老年のりよなどこれ

温泉の記

むかしより〔 〕のありければ温泉の山と
陵んとびおりし浄んぬる偈文を識し二つ
二字の傘は為史のさとの為のなと令弐
種の墓小よぢ雉苑の岩岬ば打拂へ人手
持金芝蔓の貯へも於く細道のつゞくまゝに
待ちねど十六秋の昔びきくふもつゞけ野を
覚えましくて小山田の流る園をきよく
玉葡の云ゆして門もなきや

とれしまり峠茨は幽せさ由楊州ば
越ゆるとて
山麦の細き嚢補ひとふ峠茨
里のみちふ国小たり星は右手よ詣ず
峠やまる大慈とるまして坂東八所し
一川とのや
里程よ成るゐや茂る竹もり
かどしさう如川ば道とそて
里前さまびふの満も茶と申す杵よ

と興し八ツの家に立て八幡の御社に
詣けれ社や松柏森々として千歳を
神鏡より尊し玉欄池波に流れ
ぬ神体に心を運の吉をぬかづく
唯住し所の小庵これ有○所
影向や我が清の代と玉ぐか
と楽しき宗像の縁起を案る程を
渡る
夕月ちる山桜の落々麦たちふゑ

大職の縁ありし時に白石より立ちし西上人の
風流は嘆息し愛吟白河花開く
樹下に在る河白川に至る所にて漫々として
先陣の争ひ高氣に至れば川瀬を分けて
立へる所の有り乗て小田原に着きたるの
縁栄は霧に有る例義衆として威儀を備ひ
町家の往しく冨家に似たるが如し
ワビヘタツ
吹きあらしさるの新秋こそそれ

とまりし早川の瀬にこしつ年のうちにふしぎあらは
うらり佐名田のう戦死の家をよろしく石に付原
陵
喰付し籠代きし勇士の跡
根府川の寄かくと寄せのいつ川を
アカ木
物来の権兵衛似たる女し
石潤ふりて満ししさそかんこる
行あ拭いて岩の御へ石の拳九郎の鬼
嶽つかまへ云ふをさるく虎る九八塗海瀬く

松屋翁ノ實父之

翁諱孝考 姓源 號漆水園

源本孝翁氏田中字孝夫又家山子世唱

忠右衛門武州多摩郡小山田邑郷士ナリ

享和三癸亥歳六月十六日没ス